

「これからの神戸マラソンの在り方」
に係る提言



平成28年3月

これからの神戸マラソンの在り方検討委員会

目 次

1	はじめに	1
2	提言内容	1
	(1) 基本理念	1
	(2) 第10回大会時までに達成すべき目標	2
	(3) 中期目標達成のための具体的方策	3
3	おわりに	6

【参考資料】

○ 審議経過	7
○ 提言の概念図	8
○ 神戸マラソンの開催状況(第1回～第5回)	9
○ 「これからの神戸マラソンの在り方検討委員会」設置要綱	11
○ 委員名簿	12

「これからの神戸マラソンの在り方」に係る提言

1 はじめに

ランニングを核とした県民・市民スポーツの振興を図るとともに、兵庫・神戸の魅力の発信に寄与している「神戸マラソン」は、平成23年11月に第1回大会を開催した後、昨年秋の第5回大会では、国内外から約2万人のランナー、約61万人の沿道応援者、約7,500人のボランティアや多数の協賛企業・協力団体ほか大会関係者の参加を得て無事終えることができた。この間、全国各地で都市型、地方型市民マラソン大会が新たに開催されている現状を踏まえ、今後、「神戸マラソン」を特色ある都市型市民マラソンとして、さらに進化させていくための方策を検討することを目的として、「これからの神戸マラソンの在り方検討委員会」（以下、「委員会」と表記）が設置された。

委員会では、「感謝と友情」を継続的テーマとした「神戸マラソン」を、第6回大会以降さらに質の高い大会とするため、①新規ランナー、リピーター、海外参加者獲得のための方策、②「する、みる、ささえる」の観点から、「神戸マラソン」の満足度を向上させるための方策、③その他、目的を達成するために必要な事項について検討を行い、「する、みる、ささえる」が一つになった、「オンリーワン」の都市型マラソンを実現するために、第10回大会時までに達成すべき目標（以下「中期目標」と表記）と目標達成のための具体的方策をまとめた。

2 提言内容

(1) 基本理念

○大会テーマ「感謝と友情」の継続

本大会が、阪神・淡路大震災以降、兵庫・神戸に手を差し伸べていただいた国内外の人々への感謝の気持ちの表明と、来訪する全ての人々が仲間であるという考えに基づき、震災復興のシンボルとして始められた開催の経緯を踏まえ、第1回大会からの大会テーマ「感謝と友情～Thanks&Friendship～」は、今後も維持し継続して発信していくべきである。

○大会コンセプトへの「チャレンジマインド」の追加

大会コンセプトについては、これまでの「ボランティアマインド」（自分のためだけでなく、被災された国内外の人々のためにも走る大会へ）と「ホスピタリティマインド」（走るだけでなく、兵庫・神戸の魅力も楽しんでもらう大会へ）に加えて、ランナー目線に立ち、初挑戦・記録の更新等、自己への挑戦、発展的要素を表現する「チャレンジマインド」をコンセプトに加え、常に挑み続ける大会の姿を明示するべきである。

このことにより、大会が競技レベル、年代を超えて、参加する全てのランナーが自ら挑戦し続ける大会であることがより明確になる。

(2) 第10回大会時までには達成すべき目標

【今後の方向】

平成19年(2007年)に開催された日本初の大規模市民マラソン「東京マラソン」の開催以降、国内のマラソン愛好者が激増し、全国各地でロード・レース大会が乱立する状況にある。神戸マラソンが、今後将来に向かってランナーから持続して支持を得られる大会となるためには、「する、みる、ささえる」の観点から、その満足度を高めるとともに、兵庫・神戸ならではの特色を継続して発信し、大会のブランド力の向上に努めなければならない。

一方、国内では、2017年に日本スポーツマスターズの兵庫県での開催、2019年にラグビーワールドカップ、2020年に東京オリンピック・パラリンピック、2021年には関西ワールドマスターズゲームズと、スポーツのビッグイベントの開催が、連続して計画されている。これら国際大会等の場も見据え、神戸マラソンに関わり育った人々が、将来、兵庫・神戸のスポーツ文化の新たな牽引役となるような仕組みづくりも必要である。

そのために、5年後の第10回大会開催時(2020年)までに達成すべき目標を「する、みる、ささえる」の観点から設定した。

① す る

【今後の方向性】

市民ランナーもトップランナーも共存して競走できる大会を目指す必要がある。

ランニングへの新たな興味・関心の喚起、ランニングを通じた健康の増進により、ランニングの裾野を拡大することで、ランニング愛好者の大会への参加促進を図るとともに、大会参加者のマナー向上の啓発により、大会の質の向上に努めるべきである。

【施策目標】

○国際陸上競技連盟(以下、「IAAF」と表記)におけるロード・レースの格付け取得を目標としてレースの国際ブランド化を図り、海外への大会知名度の向上にも努める。

○記録の出るコース設定へ向けて絶えず研究し、競技性の向上を図る。

○制限時間7時間を維持し、フルマラソン初参加者への配慮も継続する。

② みる

〔今後の方向性〕

震災の復旧・復興における教訓・体験の発信、兵庫・神戸の街の魅力の発信という神戸マラソン独自の開催基本理念を継承する。また、都市型マラソンとしての満足度を高めるために、観戦・応援を通じて、ランナーと大会を見る者が感動体験を共有し、地域の活性化へ貢献できる大会を目指す必要がある。

〔施策目標〕

- 大会への県民・市民の潜在的な関心を顕在化させ、大会への参画意識の向上を図る必要がある。
- 沿道住民のレース観戦も含め、大会参加者へ「おもてなし」することを通じて、県民・市民と来訪者がその場を共有した一体感を醸成する。
- スポーツツーリズムの推進により、県民・市民と来訪者の交流・相互理解が促進されることで、大会開催を通じた兵庫・神戸の魅力アップや「行きたい街」、「住みたい街」としてのブランド力の向上につなげる。

③ ささえる

〔今後の方向性〕

大会開催を通じ、関連する様々な企画の中で人的・物的・財的支援を行う神戸マラソンフレンドシップバンクについて、更なる充実を図る必要がある。また、大会開催を通じて、スポーツイベントを広く「ささえる」気運が醸成されるよう努めるべきである。

〔施策目標〕

- フレンドシップバンクを通じて、スポーツにおける寄付文化の醸成を図る。
- 神戸マラソンボランティアの継続的な育成体制を構築するとともに、ボランティアの組織化を行う。
- 神戸マラソンを通じて育ったボランティアがスポーツイベントをささえる核として、東京オリンピック・パラリンピックや関西ワールドマスターズゲームズなどの国際的スポーツイベントでも活躍できるボランティア人材の育成を行う。

(3) 中期目標達成のための具体的方策

「する、みる、ささえる」の観点での中期目標達成のための具体的方策について、以下の6つの切り口で提案する。

ア 競技性・参加者枠への配慮

市民ランナーが楽しめる大会をベースにトップランナーも共存して走れる国内メジャーな大会を目指し、多様なランナーニーズに応じた参加種目・参加者枠

への配慮が必要である。

〔展開方策〕

- ・強豪選手が出走すれば、現コースでもさらに速い記録（2時間8分台）が出る可能性があるため、エリートランナーの招聘にも努めるとともに、IAAFにおけるロード・レースラベル「ブロンズラベル」の格付けを早期に取得する。
- ・第5回大会で新設された年代別チャレンジ枠の継続により、準エリートランナーの参加促進を図る。
- ・マラソンランナーの全国的な数の増加に伴い、割り込み、ポイ捨て等、ランナーの質の低下も危惧されるが、継続してランナーから支持を受けられるよう、スタートエリアの十分な整備及び管理の徹底等、大会でのマナー啓発の対策にも努める。
- ・神戸マラソン開催以降、多様なランナーの選択肢となるランニング大会が県内各地で約50大会増加していることも踏まえて、フルマラソンニーズに対応し、第6回大会から、クォーターマラソンは定員2万人のフルマラソンに発展的に統合される。しかし、現行のクォーターマラソンのランナーニーズへの十分な配慮も必要である。
- ・方向性としては、ランニングの裾野拡大を図るため、制限時間7時間は維持し、神戸マラソン初出場枠も継続して初心者ランナーの受入れにも配慮する。また、初マラソンランナーを支援する教室の充実を図る。
- ・神戸市が主催して開催する六甲シティマラソンとの協力関係の構築を図るとともに、同マラソンからの1週間を神戸マラソンウィーク（仮称）と位置づけて関連するイベントを公募し、地域の観光等とタイアップしたPRを実施することで、神戸マラソン大会当日へ向けた街の賑わいを創出し、地域の活性化を図る。
- ・2011年8月に施行されたスポーツ基本法の、障害者の自主的かつ積極的なスポーツを推進するとの理念を踏まえ、障害のある人がスポーツに親しめる機会の拡大を図る観点から、車いすランナー参加の可能性（コース、距離等）についても検討を行う。

イ コース改善の研究

海と山に囲まれた現行コースの景観については、ランナーから高い評価を受けている。一方、コース幅が狭いとの意見もあるため、今後の道路整備計画も踏まえ、さらに安全で快適なレースが実施できるコースを継続して検討する必要がある。

〔展開方策〕

- ・大会立ち上げの際のコース設定の経緯を踏まえると、コース変更は容易ではないが、コース幅に関わらず、ランナー密度が下がればより競走しやすくなる。スタート時の混雑緩和のため、ランナーの意識を考慮の上、まず、コースの変更を

伴わないスタート時の工夫・改善について、前向きに検討すべきである。

・常にランナー重視の大会として出走定員増の視点も考慮の上、より安全で快適なレースができるよう、東西に長い神戸の地理的条件を踏まえたコースの見直し（勾配の軽減、道幅確保等）への研究・現状改善の検討を継続すべきである。

・三宮周辺地区の道路再整備に係る構想も見据え、街の賑わいの創出も期待できる、神戸らしい場所でのスタート・フィニッシュについても、長期的な課題として、研究・検討すべきである。

ウ 大会認知度の向上

国内での大会認知度が未だに高いとは言えず、ナショナルイベントとなっていない状況にあるが、オリジナリティのある大会テーマ「感謝と友情」の発信を強化するとともに、日本最高記録が狙えるトップランナーも出場する話題性のある大会にするなど、共催社以外の全国のメディアへ関心が高まる取組みの推進が必要である。

〔展開方策〕

・IAAFにおけるロード・レースラベル「ブロンズラベル」格付けを早期に取得することで、ロード・レース大会としての国際的認知度の向上を図る（再掲）。

・大会に連動した神戸ブランド（スイーツ・グルメ、ジャズ、ファッション、インターナショナル等）に関連のある企画を計画的に発信し、継続して実施することで、大会の魅力向上に努める。

・神戸マラソンの話題性、発信力向上のため、テーマ曲制定についても検討する。

・震災復興というメッセージ性の強い、被災地との交流をキーとしたランナー参加の企画により、相手地域と連動した形での全国メディア展開の方策を検討する。

エ 大会への住民の理解・若者の参画

神戸マラソンを将来に渡ってより魅力的で持続性の高い大会とするためには、コース沿道をはじめとした県民・市民への大会の理解、浸透を図るとともに、次世代を担う若者の参画に一層努めなければならない。

〔展開方策〕

・コース沿道での応援隊によるイベントや写真コンテストの実施など、大会への沿道住民・市民の理解を増し、沿道で応援する者も親しみ楽しめる取組みを企画・実施し、拡充していくことで、県民・市民の共感を得ながら参画意識の向上につなげる必要がある。

・大会実施後は、公式サイトできめ細かなアンケートを実施する等、ランナーのみならず、県民・市民等「みる者、ささえる者」の、神戸マラソンに対する意見も十分に把握し、大会運営の改善につなげていくことが必要である。

・将来的に神戸マラソンをささえることのできる、次世代を担う学生や企業の

若手社員等を主体としたサポーター集団を形成し、若者のアイデアも取り入れながら神戸マラソンを発信し、大会を育成させていく取組みも必要である。

オ 海外参加者の獲得

「神戸マラソン」という大会自体を特色あるイベントとして、地域の観光資源とあわせたPR推進を図る必要がある。

〔展開方策〕

- ・海外参加者数の増加によるインバウンドを促進し、訪日外国人へのスポーツの体験機会を支援する観点から、国内在住の外国人にも配慮しつつ、一定人数（実現性を考慮の上、1,600人（現行定員の8%程度））を目標に海外誘客を図り、スポーツツーリズムによる国際交流を推進する。
- ・インバウンド促進にあたっては、観光は兵庫・神戸のみで限定するのではなく、関西圏も含めた広域的な視野で外国人にとって魅力的な旅行商品の企画、プロモーションを行う必要がある。
- ・国内在住外国人団体のSNS等のネットワークの活用も図りながら、大会情報の発信をきめ細かに行うことが必要であり、口コミでの拡がりによるPR効果も期待できる。

カ チャリティ・ボランティアの充実

神戸マラソンフレンドシップバンクの充実と広くスポーツイベントを支援できるボランティア人材の育成が必要である。

〔展開方策〕

- ・チャリティ募集の段階で寄付先を明確にし、可視化することで、寄付への賛同者を増やすとともに、人々が共感できるチャリティメニューの検討を行う。
- ・毎回のボランティア業務への従事実績が次の大会への従事意欲につながるよう、神戸マラソンボランティアのキャリアを認定できる制度を開発する。
- ・大会業務の習熟度に応じ、熟練ボランティアをそのリーダーとして養成する仕組みを整える必要がある。

3 おわりに

委員会では、第10回大会を見据えた中期的な視点で「する、みる、ささえる」の観点から、達成すべき目標達成のための展開方策を示したが、対応が可能なものは、第6回大会から速やかに取り組むべきである。

大会の開催運営体制は、過去5回の大会で概ね確立し、形式知の継承はある一定の水準にあると考えられるが、今後、安定して持続的に大会を開催していくためには、さらに暗黙知の継承も重要である。そのため、兵庫県、神戸市、（一財）兵庫

陸上競技協会の三者が引き続き連携・協働し、更なる大会の充実を図っていくべきである。

ランニングを核とした県民・市民スポーツの振興と兵庫・神戸の魅力の発信に寄与している「神戸マラソン」は、単なる一過性のイベントではなく、回を重ねる度に「する・みる・ささえる」が一つになった、「オンリーワン」の都市型マラソンとして進化し続けることで、本大会に関わる全ての者の幸福で豊かな生活の実現に寄与する大会となるよう、取組みを推進していかなければならない。

【参考資料】

○ 審議経過

回数・開催日時	審議内容
第1回 平成27年7月31日	・検討委員会の審議計画について ・「神戸マラソン」が目指す今後の大会像について
第2回 平成27年9月15日	・「神戸マラソン」が目指す今後の大会像について
第3回 平成27年12月15日	・「神戸マラソン」が目指す今後の大会像について
第4回 平成28年1月29日	・「これからの神戸マラソンの在り方」に係る提言について

提言の概念図

ランニングを核とした県民・市民のスポーツの振興

神戸マラソン

【大会テーマ】

感謝と友情 ~Thanks & Friendship~

【大会コンセプト】

～チャレンジマインド～

～ホスピタリティマインド～

～ボランティアマインド～

する・みる・ささえる

	ランナー 約20,000人	沿道応援者 約612,000人	ボランティア 約7,500人
2015年 (H27) 第5回大会	神戸マラソンの満足度、ブランド力の更なる向上		
2016年 (H28) 第6回大会	ランニングへの新たな興味・関心の喚起 ランニングを通じた健康の増進 大会への参加促進・ランニングの裾野拡大 大会参加者のマナー向上	震災の復旧・復興における教訓・体験の発信 兵庫・神戸の街の魅力の発信 観戦・応援を通じた感動・体験の共有 地域活性化への貢献	フレンドシップバンクの更なる充実 スポーツイベントを広く「ささえる」 気運の醸成
2017年 (H29) 第7回大会			
2018年 (H30) 第8回大会			
2019年 (H31) 第9回大会			
2020年 (H32) 第10回大会			
		ラグビーワールドカップ2019開催(9月～10月)	
		東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会開催(7月～9月)	
【中期目標】	<ul style="list-style-type: none"> ・競技性と市民性の共存 ・IAAFのロード・レース格付けの取得による国際ブランド化 ・記録の出るコース設定の研究 ・制限時間7時間の維持 	<ul style="list-style-type: none"> ・大会への参画意識の向上 ・「おもてなし」を通じた、県民・市民と来訪者の一体感の醸成 ・スポーツツーリズムの推進による大会を通じた兵庫・神戸の魅力やブランド力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・フレンドシップバンクを通じたスポーツにおける寄附文化の醸成 ・大会ボランティアの継続的育成体制の構築及びボランティアの組織化 ・国際的スポーツイベント等でも将来活躍できるボランティア人材の育成
2021年 (H33) 第11回大会	関西ワールドマスターズゲームズ開催(5月)		
2022年 (H34) 第12回大会			

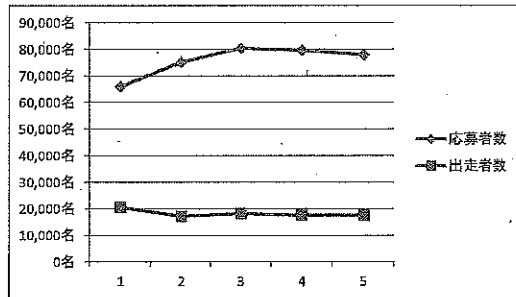
「する・みる・ささえる」が一つになった、「オンリーワン」の都市型マラソンへの進化

スポーツを通じた幸福で豊かな生活の実現

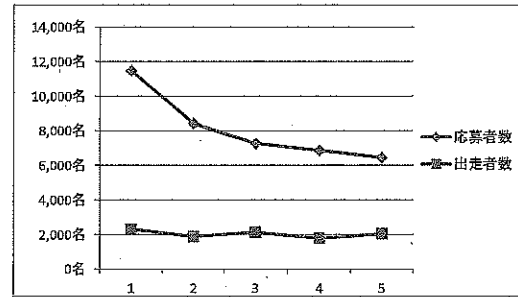
神戸マラソンの開催状況(第1回～第5回)

大会回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	
開催年月日	H23.11.20	H24.11.25	H25.11.17	H26.11.23	H27.11.15	
キャッチフレーズ	りがとうが、エールになる。			20年目のありがとう	「ありがとう」を、つぎの一歩へ。	
大会ゲスト		朝原宣治、有森裕子、高橋尚子、高石ともや	有森裕子、朝原宣治、高石ともや、山田佳子	有森裕子、朝原宣治、高石ともや、佐藤江梨子	有森裕子、藤原紀香	
招待選手等 する(出走者主要データ)	招待選手	小島忠幸、小嶋由水、小崎まり、田中千洋、上谷聡子、大山美樹、大山香織、岡美希、藤岡里奈、トッド・イングラーム、ティナ・メジャー(共にオーストラリア)	高橋謙介、梅木蔵雄、上谷聡子、田中千洋、小嶋由水、大山香織、大内唯衣、脇田茜	清水将也、高橋謙介、新井広憲、大中健嗣、コ・ジョンソク(韓国)、ハロン・マレル(ケニア)、北垣章、川内鮮輝、樋口真大、皆越晃、古川優樹、中安秀人、ロベルト・ブシー(オーストラリア)、田中千洋、上谷聡子、津崎紀久代、大内唯衣、モニカ・ニジェル(ケニア)、鈴木純子、ティナ・メジャー(オーストラリア)	高橋謙介、ハロン・マレル(ケニア)、杉本秀規、鈴木忠、地下翔太、帆波計圭斗、藤田将弘、田野昌輝、ミルドレッドキミニ(ケニア)、上谷聡子、齋藤公美、田畑郁恵、鈴木純子、石本里緒奈、出原啓太、帆波圭斗、田野昌輝、江頭徹、大谷潤子、池原実穂、山口みゆき、姉川和子	
	ゲストランナー	ステファノ・バルディニ(イタリア)、ダグラス・ワキウリ(ケニア)、君原健二、鈴木博美、深尾真美、渋谷俊浩、高石ともや	君原健二、渋谷俊浩、ダグラス・ワキウリ(ケニア)、山本亮、鈴木博美、松尾和美	君原健二、渋谷俊浩、ダグラス・ワキウリ(ケニア)、藤田敦史、鈴木博美、小嶋由水、大南博美、大南敬美、坂本直子	君原健二、佐藤敦之、渋谷俊浩、ダグラス・ワキウリ(ケニア)、小嶋由水、瀨真真美	渋谷俊浩、小嶋由水、坂本直子、ダグラス・ワキウリ(ケニア)、鈴木博美、小林祐梨子
	フレンドシップランナー		川嶋あい、松田陽子、金子菜由、間中芽衣	ウルフルケイスケ、濱中治、野中藍、金子菜由、塗木あやね、杉田康、佐藤明子、片岡真理絵、浅香久志、杉山千絵	山中伸弥、濱中治、藤本敏士、野中藍、八木早希、湯田友美、浅香久志、杉山千絵、尾形直樹、齋藤春恵、小田晶子	小原正子、がんばれゆうすけ、佐藤雄太郎、五十嵐桂子、草野知春
マラソン 定員 18,000人	応募者数	65,934名	75,173名	80,416名	79,646名	78,019名
	出走者数	20,642名	17,215名	18,267名	17,597名	17,621名
	応募倍率	3.66倍	4.18倍	4.47倍	4.42倍	4.33倍
	完走者数	20,095名	16,818名	17,816名	17,203名	17,080名
	完走率	97.4%	97.7%	97.5%	97.8%	96.9%
クォーター 定員 2,000人	応募者数	11,487名	8,426名	7,275名	6,870名	6,455名
	出走者数	2,316名	1,888名	2,144名	1,783名	2,039名
	応募倍率	5.74倍	4.21倍	3.64倍	3.44倍	3.23倍
	完走者数	2,299名	1,841名	2,082名	1,746名	1,931名
	完走率	99.3%	97.5%	97.1%	97.9%	94.7%

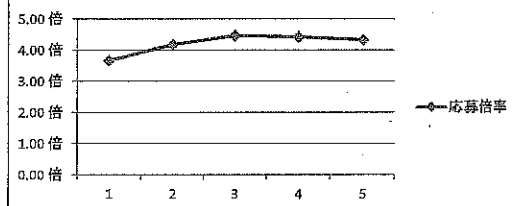
マラソン



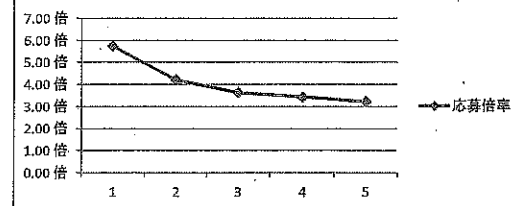
クォーター



応募倍率



応募倍率



大会回数		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	
地域別出走者数	北海道	155名	104名	105名	100名	106名	
	東北	193名	225名	302名	373名	306名	
	関東	3,193名	2,056名	2,507名	2,068名	1,951名	
	中部	1,206名	846名	1,309名	1,381名	1,107名	
	近畿	15,578名	14,271名	14,116名	13,451名	14,230名	
	中国	838名	631名	762名	712名	571名	
	四国	806名	567名	680名	683名	546名	
	九州	470名	314名	339名	307名	328名	
	海外	519名	89名	261名	275名	515名	
	合計	22,958名	19,103名	20,381名	19,350名	19,660名	
地域別出走者割合	北海道	0.7%	0.5%	0.5%	0.5%	0.5%	
	東北	0.8%	1.2%	1.5%	1.9%	1.6%	
	関東	13.9%	10.8%	12.3%	10.7%	9.9%	
	中部	5.3%	4.4%	6.4%	7.1%	5.6%	
	近畿	67.9%	74.7%	69.3%	69.5%	72.4%	
	中国	3.7%	3.3%	3.7%	3.7%	2.9%	
	四国	3.5%	3.0%	3.3%	3.5%	2.8%	
	九州	2.0%	1.6%	1.7%	1.6%	1.7%	
	海外	2.3%	0.5%	1.3%	1.4%	2.6%	
	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
記録	男子1位	2時間24分13秒	2時間21分13秒	2時間17分01秒	2時間13分45秒	2時間18分01秒	
	女子1位	2時間40分45秒	2時間39分52秒	2時間36分53秒	2時間38分24秒	2時間42分01秒	
みる	イベント来場者数						
	マラソンEXPO	27,000名	31,500名	30,500名	29,500名	28,500名	
	集客イベント	29,000名	35,400名	41,500名	35,600名	39,250名	
	沿道応援	523,000名	557,500名	585,500名	616,000名	612,000名	
ささえる	ボランティア参加人数	6,094名	7,102名	7,227名	7,415名	7,444名	
	フレンドシップバンク	ボランティアネットワーク登録者数	627名	283名	153名	127名	87名
		同 累積登録者数		910名	1,063名	1,190名	1,277名
	募金等収入総額	12,298千円	7,554千円	10,278千円	10,661千円	10,442千円	
開催経費	支出総額(決算)	675,106千円	663,605千円	654,584千円	641,544千円	615,610千円	
兵庫県への経済波及効果		5,930百万円	6,305百万円	6,592百万円	7,425百万円	7,455百万円	

【備考】

- 1 第1回の地域別海外欄は、外国籍の国内居住者を含んだ人数
- 2 地域別出走者数のうち、第3回、第4回の人数から、招待選手及びフレンドシップランナー(計30名)は除いて記載
- 3 第5回のフレンドシップバンク募金等収入総額は、H28.2.29現在で記載
- 4 第5回の開催経費は、補正後予算額で記載

「これからの神戸マラソンの在り方検討委員会」設置要綱

(名 称)

第1条 この会は、「これからの神戸マラソンの在り方検討委員会（以下、「委員会」という。）」と称する。

(目 的)

第2条 委員会は、ランニングを核とした県民・市民スポーツの振興を図るとともに、兵庫・神戸の魅力の発信に寄与している「神戸マラソン」を、特色ある都市型市民マラソンとしてさらに進化させていくための方策を検討することを目的とする。

(所掌事務)

第3条 委員会は、「感謝と友情」を継続的テーマとした「神戸マラソン」を、第6回以降さらに質の高い大会とするため、次に掲げる事項を調査・検討する。

- (1) 新規ランナー、リピーター、海外参加者獲得のための方策
- (2) 「する、みる、ささえる」の観点から、「神戸マラソン」の満足度を向上させるための方策
- (3) その他、目的を達成するために必要な事項

(組織及び委員)

第4条 委員会は、別表に掲げる13名の委員をもって構成し、神戸マラソン実行委員会会長（以下、「会長」という。）が委嘱する。

(任 期)

第5条 委員の任期は、委嘱の日から平成28年3月31日までとする。

(委員長等)

第6条 委員会には、委員長1名、副委員長1名を置く。

- 2 委員長及び副委員長は、委員の互選により定める。
- 3 委員長は、委員会を統括し、議事進行を行う。
- 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会 議)

第7条 委員会は、会長が招集する。

- 2 会長が必要と認めたときは、委員会に委員以外の者の出席を求めることができる。

(報酬等)

第8条 委員が委員会に出席したときは、報酬及び旅費を支給する。

- 2 前項の報酬の額は、「委員会の委員等の報酬及び費用弁償に関する条例」（昭和35年兵庫県条例第24号）の規定の例による。ただし、兵庫県職員、神戸市職員及び神戸マラソン実行委員会事務局職員には支給しない。
- 3 第1項の旅費の額は、「職員等の旅費に関する条例」（昭和35年兵庫県条例第44号）の規定の例による。

(秘密の保持)

第9条 委員は、会議の内容又は職務上知り得た秘密を保持しなければならない。

(庶 務)

第10条 委員会の庶務は、神戸マラソン実行委員会事務局において行う。

(補 則)

第11条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営等に必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

(施行期日)

この要綱は、平成27年7月14日から施行する。

【別 表】

「これからの神戸マラソンの在り方検討委員会」委員名簿

(敬称略)

分 野	所 属 ・ 職 名	氏 名
学識経験者 (委員長)	国立大学法人神戸大学大学院 教授	山口 泰雄
陸上競技関係者 (副委員長)	神戸市陸上競技協会 会長	西川 公明
学識経験者	びわこ成蹊スポーツ大学 教授	渋谷 俊浩
陸上競技関係者	一般財団法人兵庫陸上競技協会 副会長兼専務理事	吉井 道昭
陸上競技関係者	株式会社アシックス グローバルマーケティング 統括部マルチチャンネルマーケティング部 ブランドコミュニケーションチームマネージャー	船越 克美
陸上競技関係者	神戸学院大学社会連携部 社会連携グループコーディネーター	上谷 聡子
経済界	兵庫県商工会議所連合会 (神戸商工会議所総務部 次長)	三宅 雅也
観 光	公益社団法人ひょうごツーリズム協会 専務理事	松森 章子
共催団体	株式会社朝日新聞社 神戸総局長	中邨 清一
共催団体	株式会社神戸新聞社 地域活動局長	渋谷 和久
行 政	兵庫県教育委員会事務局 スポーツ振興課長	八木 康文
行 政	神戸市市長室広報部広報課 広報専門官	川島・デンティ
行 政	神戸市教育委員会事務局 スポーツ体育課長	中村 俊彦

※ 委員の職名は、第4回委員会開催時のもので記載